

巻 頭 言

副支部長 杉山 慎 (北海道大学低温科学研究所)

みなさまのご尽力を得て、北海道の雪氷第 37 号が発刊されます。1982 年に第 1 号が出版されてから毎年、北海道の雪氷研究者による研究成果をまとめ、年間の活動が報告されているものです。途切れることなく継続して出版された 37 年間の歩みに敬意を感じます。今年も無事に伝統が引き継がれたことに安堵し、本巻に寄稿された執筆者のみなさまと編集の労をとられた関係者にお礼申し上げます。

1959 年 5 月に設立された雪氷学会北海道支部は、今年 2018 年に 60 年目の活動に入りました。支部では「北海道の雪氷」を出版する他にも、研究発表会の開催、各種講演会の実施、HP 運営などを通じて、研究者の交流、意見交換、情報提供などを行っています。このような活動を通じて雪氷学の発展に貢献することはもちろん、雪氷・寒冷現象に関する知識の普及と啓蒙を目指しています。特に雪氷への関心が強い北海道という土地にあって、広く一般社会と結びついた活動が支部の特色といえます。本号の掲載論文を見ても、「アウトドア寒冷地防災学」、「カーリング」、「冬期の転倒と救急搬送」など、北海道における雪氷学が生活や文化に根差したものであることを実感します。またその一方で、北極グリーンランドから南極まで世界各地で展開される自然環境研究や、最先端の測定手法や工学的技術を報告する論文も多数掲載されています。北海道において蓄積された雪氷の経験と知識が、世界的な先端研究と結びついていることを再確認し、雪氷学会北海道支部がカバーする広い研究分野と豊富な人材に驚かされます。

支部の特色ある取り組みとして、雪崩や豪雪などの雪氷災害を調査して社会に情報を提供する「雪氷災害調査チーム」の活動が挙げられます。活動の中心である雪崩調査の他にも、雪崩から身を守るための講演会や技術講習会の開催で安全普及活動を行っているものです。また一般市民に向けた雪氷普及活動として、道主催の「サイエンスパーク」に参加しています。札幌駅前の「チカホ」を使ったこのイベントは、子供たちが普段見慣れた雪や氷に興味を持ち、正しく理解する素晴らしい機会です。さらに毎年異なる街を選んで地域講演会を開催する他、雪氷に関連した各種イベントを共催・後援しています。

研究分野が発展して多様化するにつれ、学会活動は時には細分化し、また時には広い枠組みへの統合が進みます。そんな中にある、長い歴史を持つ北海道支部はどんな活動を続けていくべきなのでしょう。本号を手に取られたみなさんにとって、雪氷学会北海道支部はどんな意味を持っていますか？私自身は支部に関わって 18 年になりますが、当初は憧れの雪氷研究者に親しく話しかけられて感激しました。やがて様々な職場で活躍する方々と出会い、異なる立場から見た雪氷学について学び経験することができました。そして最近は、若い世代の活躍に刺激を受けています。何と言っても、北海道という生活環境を共有していることが支部活動の魅力です。道内での研究・教育活動についてはもちろん、自宅の除雪、子供のスキー学校、家庭菜園の作業時期など、広く情報を交換しています。少し気が早いですが、老後の楽しみはこのような方々との付き合いなのかもしれないな、と思います。雪氷が重要な意味を持つ土地柄に甘えることなく、会員のみなさんが意義を見出し、楽しんで活動できる支部を目指したいと考えています。今後ともご協力のほどよろしくお願いします。